

太宰治全集

11

筑摩書房

太宰治全集第十一卷

昭和四十三年一月六日初版第一刷發行
昭和四十五年六月三十日初版第五刷發行

著 者 太 宰 治

發行者 竹之内靜雄

發行所 株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号 一〇一—一九一
電話東京(二九二)七六五(代表)
振替 東京 四 一二三

印刷・三 晃 印刷
製本・鈴木 製本

(分類) 0393 (製品) 70011 (出版社) 4604

第十一卷

目次

昭和七年
昭和八年
昭和九年
昭和十年
昭和十一年
昭和十二年
昭和十三年
昭和十四年
昭和十五年
昭和十六年

三
一三
二四
三三
四二
五二
六二
七二
八二
九二

昭和十七年	二一五
昭和十八年	二二一
昭和十九年	二四三
昭和二十年	二五五
昭和二十一年	二七九
昭和二十二年	二八一
昭和二十三年	二九七
後記	三三三
索引	三五四

太宰治全集
第十一卷

昭和七年

六月七日東京府下中野町小淵四十八番地川崎想子方銀吉より東京府下豊多摩郡野方町新井三百三十六番地工藤永藏宛

本日（六月七日）お手紙（五月二十五日出し）を拜見しました。元氣な由でなによです。久しく御無沙汰してひました。私も色々と事件が重つてつい失禮してゐたのです。私が少しへまをやつて、うちから送金をとめられてゐます。弱りました。兄貴は大立腹で私は散々罵られました。くやしくて涙が出た。此の事件はくわしく言はれませんが今後どうなるかさつぱり判りません。私達はそれでも元氣ですから御安心下さい。食ふだけの事は出来ます。うちでもまさか、このまゝにして、私達を放たらしにしはしないだらうと存じます。「冷靜に而も充分なる屈伸性」をもつてやつたのですが、どうもいけませんでした。私達はしかし樂觀してゐます。あなたへの送金は、しかし、必ずつづけて行きますから、御心配しないで元氣であつて下さい。あねさたちは五月上旬四國へ下りました。「一年か二年経験の爲に行つて来るならいいが、ずるずるになるな」と皆して言つてやりました。トビ氏の所で送別會をやりました。私とあねさとヒラオカ氏とオカワ氏とトビ氏と五人で會とは五〇錢でした。

徹夜で吞みました。トビ氏とオカワ氏は晝のつかれで早くねましたが、あとの三人は夜明け迄のみました。酒（一升五合）がなくなつたので私がトビ氏の臺所をさがしてかくしてあつたビール半打を見つけて三人萬歳を叫んで、それをけるツと吞みました。大いに感激しました。私も歌を唄ひました。

シラテイ氏は落第しました。論文がいけなかつたのださうです。この春の休みにうちへ歸つて、東京へ来る時うちから五萬圓盗んで来ようとしたら見つけられて勘當された、と威張つてゐました。うそか本當か判りません。今は、うちから金が来てなくて、友達の話に成つてゐる、とも言つてゐました。

あの人の事はどうも奇怪じみてゐます。

フヂノ氏は無事卒業しまして歸郷してゐます。東京の或る喫茶店の娘と語らひ、之と結婚する筈でフヂノ氏の母上も承知、ダンカも承知で、さて、その娘の親元へ交渉に行くと、（その交渉役はトビ氏）仲々はかばかしい返事を呉れないのです。トビ氏はその娘の親元たる水戸の山奥迄わざわざ會社を休んで出かけたのですが駄目らしいのです。親元は、フヂノ氏の家の財産などを調べて、あまりよくないからやらないといふ腹らしく、その娘もフヂノ氏の所へ

一本も手紙をやらないさうで、フヂノ氏の母上はトビ氏の所へ「又水戸へ行つて下さい」と手紙でたのんでよこしました。多分駄目になるのではないかとトビ氏は言つてゐました。娘はあんまりシヤンでもなし、たゞおとなしいやうな人です。

イトウ氏はカタタニさんと近いうちに結婚してトビ氏と共同生活をする筈です。キク氏は松竹へ入りました。多年の宿望を果したわけです。松竹レビュウの脚本部です。同氏のものは、先刻、ラヂオで放送され、原作者として五十圓貰つたさうです。

その他あまり變つた事はございません。ナカティ氏はシバキで急しく一つばしの文學青年になりました。大した元氣です。タモとは此頃さつぱり行き來して居ませんが、なんでもダンサアと一緒に居るさうですよ。困りますね。ロシア語やエスペラントを勉強して居るさうですが、こぼみ心など起る程です。私達も一生懸命に勉強します。私達の方は御心配なく。必要のものがあつたら遠慮せず言つて下さい。どうにか都合して送りますから。金も、そのうちに、定期的にお送り續けます。では又。

〔註〕

(一) 架空の住所。「川崎想子方」としてゐるのは、工藤氏が川崎市の某女方に假寓していたことと、當時川崎方面の工場に爭議が續發していたことからこしらへあげた名前。銀吉は高等學校時代の筆名の一つ。

(二) 青森中學、弘前高等學校の先輩。當時、治安維持法違反により豐多摩刑務所入所中。

(三) 工藤氏入獄中、太宰は月々五圓の差入れをしていた。

(四) 飛島定城氏。三兄圭治の友人。弘前高等學校の先輩。昭和七十年、太宰と同居す。

(五) 平岡敏男氏。弘前高等學校の先輩。

(六) 藤野敬止氏。弘前高等學校の先輩。

(七) 菊谷榮氏。

(八) 中村貞次郎氏。青森中學校の同輩。「津輕」のNさん。

二

六月九日東京府下中野町小龍四十八番地川崎想子方銀吉より東京府下豐多摩郡野方町新井三百三十六番地工藤永藏宛
工藤さん

昨日川崎さんの所へ遊びに参りましたらなにか面白い話をあなたに知らせて呉れとのおたのみで面白い話なら私には山ほどあります。川崎さんには文才がないから何も書けませんでせう。私には類稀な文才がありますから、これから次々と珍なニュースを報告しませう。期待して下さい。

先づナカティ氏の四郎さん事件といふ甚だ珍妙なものを紹介します。以下は殆んど實話ですから臆をつぶさぬやう御用心しかるべきです。

或日ナカティの所へ信ちやんが遊びに行きその晩は泊つて、次の朝ナカティの借間を訪れた紳士があるのです。ナカティねぼけ顔で部屋の外へその訪問客と逢ひに出掛けたと思ふと脱兎の如く血相を變へて部屋にかけ戻り、「信ちやん、信ちやん、起きろ、起きろ」と絶叫して、どんどんふとんを上げて、信ちやんをたゞき起しながら「濱尾が来た、濱尾先生だ！」とわなわな言ふのです。信ちやんたるもの甚だ心外に感じて「眠いところをたゞき起すとはなんだ」と怒つたさうです。所がナカティはそれも耳にいれず、どんどん部屋を片づけました。濱尾とはナカティの日頃崇拜する大衆小説或は探偵小説家元検事爵濱尾四郎その人なんだから事件は面白いのです。やがてナカティはよい着物に着かへ濱尾を「先生お待たせしました」と部屋に招きました。信ちやんもその探偵小説家におじぎをした。ナカティそわそわして「ちよつと顔を洗つて参ります。」と洗顔して來てから丁寧な初對面の挨拶をなした。(ナカティは前から濱尾を崇拜して手紙などやつて居たが逢ふのはその時が初めてでした。) 信ちやんツラツラ濱尾を見るに甚

だシブタレて居たさうだ。毛じらみがたかつて居るらしくしじゆうズボンのポケットに手を入れてはぼりぼりキンタマのあたりをかいて居る。探偵小説家といふものはグロなものだと思つたさうだ。ナカティ頗る固くなつて色々不手際な質問を發し「あなたは華族さんでせう？」と變な聞き方をした。おせじのつもりであつたらしい。濱尾すまして答へる。「いや、家族は田舎に置いて來ました」こんな工合で甚だ皆の會話がチグハグであつたさうです。やがてナカティおしいれをガタゴトさせること暫くあつて後、うやうやしくフクサに包んだものを持ち出した。そろそろほどくの中には彼の小説原稿が入つて居たのだ。「先生、私の小説です、ヒ、ヒ、ヒ」といやしくも悲しいおべつか笑ひをして先生におづおづ差し出した。先生手に取つて讀んで「どうも下手だ。ピンと來ない」ナカティ「さうですか」としよげる。先生「もつと實話的に書いたらいいでせう」ナカティ「はゝあ、なるほど、實話的にね」とあの變な江戸辯で感服した。それから色々話をするがどうも先生あまり、小説の事など話たがらない。玉の井やおでん作のり方に就いては熱心に話をする。信ちやん退屈してナカティの許を辭去した。

晝はナカティ貧乏財布をはたいて先生に卵どんぶりをお

ごつた。先生は仲々歸らうとしない。ナカテイ午後新宿で友達と遊ぶ約束があつたので、先生に「僕あの、まことに失禮ですが、新宿へ行く用事がございますので……」と言ふと先生は言下に「あゝ僕も一緒に行かう」と言つた。二人つれだつて新宿へ出掛けたが、友達はナカテイを待ち合して居たが、ナカテイは變な男と歩いて居るから「ナカテイ君あれは何者だ」と低い聲で聞いたらナカテイ傲然と「あれか、君はあの男を知らんか、寫眞が何かで見た事あらう。」とニヤニヤ得意らしく言つてから、一段と聲をひくめて「濱尾四郎さ、濱尾四郎」と友達に言つた。それから又「僕はあんなえらい人と知り合いになつた上は、もはやだ、にのやうに食ひついて一生あの人から離れぬのだ」とけなげな覺悟を示したりした。卵どんぶり一つで濱尾先生を買収したつもりらしい。彼は或ひはもう新進大衆作家を夢みて居たのかも知れなかつた。

その夜別な友達がナカテイの所へ遊びに行つたらナカテイは居ない。十二時頃ナカテイは濱尾先生とべるべろに酔つて歸つた。そして「先生今夜は實に愉快でした。どうか私の所へ泊つて下さい。」と酒はナカテイがおごつたらしく、ナカテイ一生懸命に大小説家の機嫌をとつたのだ。子爵濱尾四郎氏はその臭い部屋に泊つたのだ。ナカテイとそ

の友人と濱尾先生と三人が泊つたのだ。

さて、ここに大問題が起つた。

或ひは知つてるかも知れないが、東京で大評判になつた勇いさゝか(?)少年誘拐事件の犯人たいほの記事が翌日の新聞に三段抜きででかか乗つた。共犯者三人と新聞に出て居たがその共犯者の二名は、なんと、ナカテイ氏と濱尾四郎氏だつたんだから驚くではないか。實を言へばナカテイ氏のべるべろに酔つた晩から、刑事が張り込んで居たのださうです。ナカテイの隣部屋に本物の共犯者が棲息して居たので、朝になると、刑事がすぐその共犯者某(主犯者は別の所でとらへられました)を捕へ、それから、念の爲に隣のナカテイの部屋へ入つて行くと床一つがからであつて、刑事達は前夜たしかにナカテイの部屋には三人居ると調べて居たのだから、ナカテイ等をたゞき起した。「コラ、ここに居た人はどこへ行つた」ナカテイ寢はけ顔で、まごまごしながら見ると友人が居ない。もう學校へ早くから出掛けたのだ。ナカテイは甚だへまな答辯して氣がきかぬ風體をして居るのでこいつらも共犯者に違ひないと遂に濱尾先生と二人で留置場へ入れられた。

ケイサツへ行くとナカテイと濱尾先生は別々の留置場に入れられた。ナカテイは留置場に入る時持物皆とられた。

お巡りさんがナカテイのズボンのポケットからきたないハンケチを取らうとしたら、ナカテイ泣き聲で「これだけは、これだけは許して下さい」

お巡りさん「なんだ、こんな臭いハンケチなにするんだ」ナカテイ「僕、鼻が悪いんでね、鼻汁が出ると困るんです」と言つた。それからナカテイの眼の前で濱尾四郎先生は散々にお巡りさんにひつばたかれて居た。何か生意氣な事をしたらしいんださうです。ナカテイは驚いた。元検事ともあらうものが、こんなにたふかれるものかしらん。と眼の前で大先生がたたかれて居るので、もう胸がいたんで胸がいたんで、ならう事なら我が身は先生の身がはりにならうかしらとも考へた。

話は之で一段落、濱尾もナカテイも無實の罪はれて翌朝放免された。濱尾は偽物であつた。

ケイサツを出る時ニセ濱尾はナカテイに言つた。

ニセモノ「どうも失禮しました。これで君も僕がどんな人間か判つたでせう」

ナカテイ「いやいや、私こそ失禮しました。私の所へ泊つた許りにあなたへこんな災難をかけまして」ナカテイは神様のやうに寛大であつた。

之には後日談がある。このナカテイの濱尾四郎さん事件

は大變な評判になりあらゆる人達にうたひはやされた。定シロさんは之を耳にし、本物の濱尾氏に或日偶然逢つた時、定シロは濱尾氏に之を告げた。濱尾氏は非常に興味を持つて「その男と是非逢ひたい」と言つた。定シロはナカテイに紹介狀を書いてやつた。ナカテイは今度は本物の所へ出掛けた。ナカテイ大いに感激して「何がしあわせになるか判つたものでない。濱尾氏は僕の原稿を読んで呉れると約束した」と言つて居る。本物の濱尾氏の所へもそのニセモノが二三度金を貰ひに行つた事があると言ふ事が濱尾氏とナカテイと話合つた結果判つた。その後濱尾氏の所へそのニセモノが又ノコノ金を貰ひに行つた時、本物はニセモノの皮をはいでやつた面白い話がある。

今日はこれでおしまひです。此の次の時はもつと面白いのを書きます。種はいくらでもありますから安心して下さい。

定シロさんは上海に行くかも知れません。禁足命令が來て居ますから。定シロさんやけになつて「もうかうなれば」と貯金を皆今のうちに使はうかなど計畫して居ります。私達は皆元氣です。五圓也同封しました。なにか御不自由がございましたら、御遠慮なくおつしやつて下さい。からだを御達者に。では又近いうちに。

三

七月（日附不詳）東京市日本橋區八丁堀より東京市四谷區
北伊賀町二十九番地小館善四郎宛

善四郎さん

先日は失禮。

あの後こちらで相談してみましたら、君と高谷君と二人で五十圓で置いて貰ふことにきめました。高谷君が二十五圓出せないやうであつたら、君が三十圓出して高谷君が二十圓出したらどうですか。高谷君と相談して下さい。

食事の世話は、やはり谷自動車屋の叔母さんにも頼んだらいいと思ひます。私達がすると又色々金木の家の人達がうるさいから、谷さんへは私達からさう頼んで置きます。此の邊を京姉にもはつきり申上げて置いて下さい。

沼津へは三十一日に立ちます。向ふへ着いたらすぐ青森の方へ手紙を出します。芝のうちの方はなるべく早く確實にきめて下さい。高谷さんにも極力すゝめて、きまつたら沼津あてに御一報下されば私から谷の方へ通知して置きます。

保さんや京姉へは、私から簡単に手紙出します。

母上様はまだお歸りになりませぬか。よろしくと申して下さい。沼津へ着いたら改めて御禮狀出すつもりです。では、元氣で。

修治

〔註〕

- (一) 太宰の姉、京の夫、小館貞一氏の三弟。
(二) 小館保氏。貞一氏の次弟。

四

八月二日靜岡縣沼津市外靜浦村志下二百九十八番地坂部啓
次郎方より青森市濱町二丁目野澤たま方小山きみ宛

母上様

しばらく御無沙汰してしまいました。お許し下さい。昨日から表記の所へ来てあります。初代と二人で八月一杯ここでからだをきたえるつもりです。今迄色々心配をかけましたが、もう大丈夫です。七月の半頃に私ひとり青森へ行つて、あの事件を何事もなくすまして來ました。もともと私には關係の薄いことですから別にとがめだてもありませんでした。學校の方も九月から又行くことになりました。うちからは送金がへらされました。今迄百二十圓だったのが、

こんどから九十圓になりました。そのうち十圓は貯金するのださうですから、結局八十圓で暮さねばなりません。よほど氣を附けねばいけないと存じてゐます。こちらへ來てからは、夜もよく眠れるやうになりましたし、からだ工合もよいやうです。初代もうれしがつてゐます。

こちらでは皆様達者ですか。叔父さんも元氣でゐます。誠一君も達者で仕事に精出してゐます。時々私たちの所へ遊びに來てゐました。

八月すぎると又東京へ歸つて、新しく家を借ります。その時又お知らせします。

婆ちやにもよろしく。

野澤のおどさにもよろしく申して下さい。

おからだ御達者に。

修 治

〔註〕

(一) 北芳四郎氏の親類。坂部武郎氏〔老ハイデルベルヒ〕の佐吉さん)の兄。

(二) 初代の母。

(三) 左翼の非法法運動に従事したこと。

(四) 吉澤祐氏。きみの弟。

(五) 初代の弟。

五

八月九日静岡縣沼津市外靜浦村志下二百九十八番地坂部啓次郎方より青森市浪打六百二十番地小館善四郎宛(はがき)

前略

電報拜見してすぐ谷の方へ通知して置きました。母上様を始め皆様のありがたい御理解を以てあなたも望む所へ自由に下宿出来るやうになつたのですから、これからは尙一層勉強なさるやうに。之は僕からの希望です。

谷の住所は東京市日本橋區通二丁目五ノ七谷鎮次郎。芝の方はハツキリ判りません。今問ひ合せてゐます。判り次第お知らせします。

六

八月十二日静岡縣沼津市外靜浦村志下二百九十八番地坂部啓次郎方より青森市浪打六百二十番地小館善四郎宛(はがき)

善四郎さん

その後どうしてゐます。私達は退くつしてゐます。一昨晩近所の俳句好きの青年たちと俳句に就いて語り合ひました。

谷でもよろこんでゐます。

谷から芝の住所知らせて來ました。芝區白金三光町二七六高木氣附松井周三で行きます。

いつ頃御上京ですか、高谷君も芝へ來ますか、その邊御知らせ下さい。

七

十二月二十五日東京市芝區白金三光町二百七十六番地高木方より東京市杉並區高圓寺六百十二番地今官一宛

お手紙拜誦。

井伏氏訪問は三日ときめませう。三日の午前中貴兄の宅を私おとづれます。樂器について呻吟してゐるとか、大いに意を強うしました。井伏氏のお手紙にも「今官一は君のよき友也」とあつた。此の言の依つて來る所も、ひつきやう君のこの呻吟にあると愚考する。

はげめよや。

私は氣が短いから、早く君の樂器のセンリツに感動したくてならぬのだ。私をして感動せしめなさい。

しかしあせる必要もないと存じます。ことしはまだ五日あまりある。西歲吉辰ほのぼのと明けるころほひ、嚴然とペンを擱くのも亦いいではないか。

私も亦花作りに苦勞してゐる。

「この花を見よ」「この花を見よ」と呟きつゝ。

汝はかの樂器をかなで、われはこの花をさぐげ、世の群盲をなぐさめん。

(私は正氣で言つてゐるのですよ)

思ひあまつて後略のまゝ

草々。

今官一様

津島修治